

誰が袖図屏風における「定型的」図様形式の展開 —— 小袖衣装の描写に関する考察

奥田 晶子（京都市立芸術大学）

「誰が袖図屏風」と総称される屏風絵がある。無人の空間に衣装を主要モチーフとして描く屏風絵であり、近世の風俗画中に特異な地位を占める作品群である。しかし現状の誰が袖図屏風研究では、個々の作例の特質が知られるのみであって、作例群全体を大きく捉え、その中での各々の位置付けを明らかにする試みは、未だ十分にはなされていない。

現在、図様を確認できる誰が袖図屏風の作例は 53 点である。本発表で初めて指摘するように、これら 53 点は、造形性によって大きく二分できる。まず一つは、構図および衣装モチーフの特質において、類似した表現を共有する「定型」作例群(全 53 点中 17 点)である。今一つは、その定型を採用しない、非「定型」作例群である。この画題に特有の定型的表現が明らかに看取される事は、極めて重要視すべきであろう。本発表は、この「定型」作例の特質を明らかにし、図様の展開を論じる事で、画題の特質を探る試みである。

発表者はこれまで、「定型」作例を中心に実見調査を行い、独自の試みとして、①小袖モチーフ各部の採寸、②小袖意匠の展開図の作成、③模様模式図の作成を行った。本発表では、この調査結果をもとに、以下に示す二段階の考察を述べる。

まず、モチーフである各小袖の属性を分析し、絵に描かれた時代性を検討する。この考察から、「定型」作例は、①小袖形態の上では少なくとも元禄期以前の形式を示している事、②寛文小袖系統の意匠配置が見られない事、③摺箔の加飾技法を多用する事を指摘する。これらから、「定型」に描かれる衣装は 17 世紀の第 2 四半世紀一寛永年間一の属性を示す事を指摘し、「定型」図様の年代的モデルを寛永年間頃と位置付ける。

一方、類似の図様からなる「定型」作例群は、絵から絵を作る事によって制作された作例群である。そこで次に、写し描かれる過程で生じたであろう、形態の崩れや付加による変化、作画技法の比較対照を行い、「定型」作例群内の変遷を追う。この考察の結論として、もとは小袖衣装の綿密な描写に大きな焦点が置かれていた図様に、さらに絵画的な創意が加わっていく流れが展開した、という仮説を提示する。

従来、誰が袖図屏風は、邸内遊楽図などの室内景から切り離される形で成立したとする説がある。それに対し発表者はかつて、誰が袖図屏風に用いられる加飾法が染織の摺箔の技法と共通である事を指摘し(『デザイン理論』53 号/2008 年)、従來說では捉え切ることの出来ない、誰が袖図屏風の特殊性を指摘した。今回の考察で得られた結論と合わせると、誰が袖図屏風と小袖衣装との間には、単に絵とそのモチーフという以上に強い関連性を見出す事が出来る。誰が袖図屏風はその成立の当初、遊楽図等の制作の延長ではなく、むしろ小袖制作の場に非常に近しく、その傍らで制作されるようなものであったのではないか、というのが発表者の主張である。